

学習内容報告書 フォーマット

学校名	独立行政法人国立高等専門学校機構 広島商船高等専門学校
授業者	藪上 敦弘

1. 単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

1-1. 単元名

水難事故から身を守る学習

1-2. 学年

高等専門学校本科 5 年生・中学 1 年生

1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

高専：卒業研究 / 中学校：保健体育（水泳）

1-4. 単元の概要

高等専門学校本科（商船学科 5 年）生が中心となり、島内に居住する中学生を対象に、水難事故を防止するための教育プログラムを開発する。船員養成課程にて学んだ内容を踏まえ、学生たちで「水難事故を防止するには」何が出来るかを考えさせていく。具体的な活動は以下の教育プログラムを考案した。

① 水難事故を防ぐために必要な基礎的な知識・スキルの習得

- ・海との関わりや海の危険性について、理解を深める。
- ・島内海水浴場にて離岸流などが発生する場所を検討する。
- ・自己救命のための技能（着衣泳・背浮き）を習得する。

② 船外へ逃げる脱出訓練（シーサバイバル訓練）

- ・救命胴衣の着用訓練
- ・船からの脱出を想定した飛び込み及び救命筏への乗込み訓練

1-5. 単元設定の理由・ねらい

世界保健機関（WHO）は 2014 年に、溺水に関する報告書「Global report on drowning」を発表し、世界中で年間 37 万 2,000 人、1 分半に 1 人の割合で溺れて命を落としていることを明らかにした。国内では、平成 28 年度のマリンレジャーに伴う事故者数が全体のうち、遊泳中の事故が約 37% を占め、年齢別の事故者数では 20 歳未満の割合が約 40% であり、若年層が事故に遭う確率が高いことが分かる。そのため、島内にて学ぶ中学生に対し水難事故防止に関する教育を行い、事故率を減少させることを目的とする。

1-6. 育みたい資質や能力、態度

①アントプレナーシップの育成

- ・事業を行うにあたり、0 から 1 を創造するための要素を学び、新時代に求められるリーダーの資質を養う。

②教育プログラムを通じた水難事故への対応能力の育成

- ・困難なことに対する挑戦力、またそれを乗り越えた際に得られる成功体験や経験を通じ、災害発生時における自己救命技能を身に付ける。

1-7. 単元の展開（全 36.0 時間）※卒業研究単位数：7.0 単位（週 7.0 時間×30 週分）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
3.0	水難事故を防止するための教育内容の検討 <ul style="list-style-type: none"> ・ ガイダンス（概要説明） ・ 海洋教育の必要性について ・ テーマの設定 ・ 世界的な溺水者数を調べ、事故原因を調査する。 ・ 国内での水難事故発生状況を調べる。 ・ 安全な泳法や救命方法（蘇生法）について学ぶ。 	<教師の指導> <ul style="list-style-type: none"> ・ 水難事故に関する基礎的な知識を学び、発生原因や事故の起因について調べ、自分なりの考えを持たせる。【課題設定能力】【情報分析能力】 ・ 各意見をディスカッションし、教育内容の検討を行う。【コミュニケーション能力】 <評価> 現状と、あるべき姿を正確に把握し、あるべき姿になることを阻む根本的な問題を見極めて、あるべき姿に近づける方法を考え出させる。
14.0	水難事故防止に関する教育プログラムの開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校における学習指導要領（保健体育・水泳）の内容確認 ・ 水泳事故防止に関する心得や、保健分野の応急手当について学ぶ。 ・ STCW 条約に定められる救命講習内容の確認 ・ サバイバルスイムの重要性 	<教師の指導> <ul style="list-style-type: none"> ・ 船員養成課程にて学んだ内容を生かし、専門的な知識を工夫しながら、どのようにすれば多くの人が学べる内容に出来るかを考えさせる。【主体性】 ・ 安全への理解を一層深め、地域の特性を生かした内容を考案させる。 【問題解決能力】 <評価> 問題を認識する力、解決策を考える力
12.0	教育プログラムの展開・実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育プログラムの実施にあたり、プログラムの説明を連携機関に対し行う。 ・ 連携機関とのスケジューリングを主体的に行う。 ・ 本科（商船学科 5 年生）を中心とし、円滑に事業が実施出来るよう体制の構築を行う。 	<教師の指導> <ul style="list-style-type: none"> ・ 連携機関との連絡方法やマナーなどについて、キャリア教育の一環として行わせる。【マネジメント能力】【合意形成】 ・ 事業実施にあたり、学年を横断したグループ形成を行い、目的達成に向けた活動が出来るにする。【チームワーク】【リーダーシップ】 <評価> 「主体性・多様性・協働性」を養うことができたか。
7.0	開発した教育プログラムの検証 <ul style="list-style-type: none"> ・ 開発したプログラムの教育効果を検証する。 ・ アンケート調査結果を分析し、考察する。 ・ 今後の課題を抽出する。 	<教師の指導> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業取組により出てきた課題とその改善にむけての方策を立て、事業のまとめをさせる。 【問題解決能力】 <評価> 外部評価（アンケート結果）による。

2. 学習活動の実際

実施した単元中のキーとなるような時間（導入の時間・主となる活動の時間・まとめの時間など）の学習内容をご記入ください。また、複数の時間についてご記入いただける場合には、この項目をコピーして複数記入していただいて構いません。

2-1. 単元における位置づけ

単元 時間中の 時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目 / 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

2-2. 本時の目標（開発した教育プログラムの指導要領）

1. 水難事故を想定し、事故に遭遇した際にも対応できる「知識」・「スキル」について学ぶ。
2. 着衣にて水に落ちた場合の対処方法（着衣泳・サバイバルスイム）について学び、安全への理解を深める。
3. 水難事故発生時における対処法や防止策（救命胴衣の着用）、救助法について学ぶ。
4. 船での事故に巻き込まれた際に、船外への脱出を想定した対応方法について学ぶ。

2-3. 本時の展開（開発した教育プログラムの指導要領）

○主な学習活動 / 反応	□教師の指導・支援 / ◇評価の視点（方法）
<p>○オリエンテーション（ガイダンス）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の全体的な構想を把握し、学習の見通しを持つ。 ・学習のねらいや特性を理解し、安全な学習の進めたかを考える。 ・遊泳中における事故発生原因や危険要因について知る。【知識・理解】 ・溺水の原因や対処方法、溺水者の救助法について知る。【知識・理解】 <p>※水難事故の原因について意識させ、授業の意義を理解し、準備を整えさせる。</p>	<p>□学習の見通しを持たせ、授業の意義について理解させる。（防災・減災の観点も取り入れる）</p> <p>□安全に対する意識を高め、事故防止に関する心得を遵守するなど安全を確保させる。</p> <p>□グループ編成や係分担を行い自主的自発的に活動できるようにする。</p> <p>評価方法</p> <p>◇説明を聞いて学習に生かそうとしている。</p> <p>◇積極的に発言し、なおかつお互いの意見を交換できる。</p> <p>◇意見交換時にリーダー役となり、意見を取りまとめることができる。</p>
<p>○事故防止に関する心得について</p> <p>【重要項目】水の危険から自己の生命を守るとともに、事故に遭遇した際の対処方法などを身に付ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事件事例などについて説明し、予備知識を得る。 ・きまりや心得を守って、安全に授業を受けることができる。【態度】 	<p>□水という危険を伴いやすい環境で授業を行うので、事故防止に関する心得を守るなどの安全に留意する態度を養わせる。</p> <p>評価方法</p> <p>◇安全な学習の仕方が理解できる。</p> <p>◇説明を聞いて学習に生かそうとしている。</p>

○着衣泳・サバイバルスイム

・プールなどで水着での泳ぎと違う難しさについて身をもって体験する。【知識・理解】

・不慮の事故に出会ったときに落ち着いた対応ができるようにする。【技能】

・着衣による感覚の違いについて理解する。【知識・理解】

・着衣に適した泳法（背浮き・ラッコ浮き）を知る。



図：背浮き



図：ラッコ浮き

・エレメンタリーバックストロークについて学ぶ。【技能・発展】

※泳力が十分に身につけていない場合は、浮力体や補助具を使用して行う。

□安全への理解を一層深める。

□自己の生命を守るための行動や対応方法について学ばせる。【目標】

□体力を温存したり、体温を保持しながら長く浮くことの大切さについて理解させる。

□着衣での入水を体験させ、対処方法など実演や実技を交えて理解させる。

□はじめは自由な泳法にて体験させ、どの様な泳法が良いかを各自で考えさせる。

□危険が伴う学習であることを周知し、安全確認を十分行う。

□水難事故に遭遇した際には、動かずその場で救助を待つことを教える。合言葉は「浮いて待て」。

□保健分野の応急手当と関連させ指導する。（心肺蘇生法）※指導者は予め消防署が行っている、救命入門コースなどを受けておくと良い。

評価方法

◇説明を聞いて学習に生かそうしている。

◇課題を解決するための練習を工夫しているか。

◇安全に対するきまりや心得を守って活動できているか。

○シーサバイバル訓練

・救命胴衣の着用と使用について学ぶ。

→入水時に脱げないよう、体に密着するように着用し、ベルトなどの調整を行う。

→レジャー用と船舶搭載用との違いを認識する。

・イマーシヨンスーツの着用と使用について学ぶ。

・高所から水中への飛び込み（船からの脱出）

→船から海へ飛び込む際の、姿勢と方法について理解する。

・救命胴衣着用時における救命筏への乗込み

→救命筏の構造について理解する。

→漂流時における生活環境について理解する。

・救命筏内の初期行動（生存行動）

【技能】【知識・理解】【思考・判断】

STCW 条約 A コード表 6-1-1（個々の生存訓練）に基づき、訓練内容を決める。

□救命胴衣は、正しく着なければ効果を発揮しないことを理解させる。

□手順に従い、速やかに着用できるよう指導する。



□船から飛び込む際、必ず救命胴衣確認を行い、姿勢、その後の行動について予め指導しておく。飛込後の安全確認を怠らない。

評価方法

◇課題を設定し、解決していく学習を理解し、活動することができたか。

3. 今回の活動の自己評価

今年度の活動については、年度当初よりコロナ禍の影響にて予定通り進めることが困難な状況ではあった。しかしながら、教育プログラムの開発に向け、リモートにて学生と打合せを繰り返し、工夫し事業展開をすることができた。プログラム内容は、「水難事故防止」をテーマに中学校向けの体験プログラムを考案した。また、防災や減災にも関連付けた内容を盛り込むことにより、津波などの災害発生時にも対応できる知識・技能を学ぶことができる、海洋教育プログラムを開発することが出来た。

豊かな自然環境の中で学び進めることや、生活の基礎を築いていくためには、自らの命を守りきる知識と技能や共生の視点を踏まえた取り組みが一層重要であると考えられるため、新たな海洋教育の一例を示すことができた。プログラム体験者からは、「船に対して少し恐怖心を抱いていたけれど、船の中での防災対策について知り、体験することを通じて恐怖心が和らいだ」などの意見があった。



救命胴衣の着用



救命いかだへの乗り込み



イマーシヨンスーツ着用

4. 今後の課題

開発した教育プログラムの活用に向け、島内教育機関と連携し継続した実施を目指す必要がある。この度連携した中学校とは、引き続き来年度も連携し実施していく予定である。また一度きりの体験では、学習効果の定着が困難であるため、手軽にいつでも学ぶことができるデジタル教材の作成を行い学習効果の向上を目指したい。

5. 本学習内容報告書活用にあたっての留意点

実施にあたり、海・船といった特殊な環境下での実施となるため、安全に十分留意し専門家の指示のもと実施することが望ましい。

※実施した單元ごとに作成してください。

※写真、画像、図表等の使用可。必要に応じて記入欄やページ数を増やしても構いません。

※基本レイアウト

フォント：MS 明朝、10.5 ポイント / マージン：上下端 20mm、左右端 16mm

※ファイル名は「学習内容報告書_学校名」とし、複数提出する場合は学校名の後に数字を記載してください。

例：学習内容報告書_海洋市立パイオニア小学校 1

※年間指導計画（年間の指導計画における単元の位置づけが分かる資料）があれば別添資料として提出してください。フォーマットの指定はありません。